

地上波デジタル放送用受像機

機器選定経緯

保存資料シリーズ

ハイビジョン画質といえども放送では圧縮画像、この圧縮という言葉は職業上も自分の前に大きく立ちはだかりました。様々な画素数のモノクロ、診断に供する動画像という分野と、報道やエンターテインメントのためのカラー動画像という、目的や用途の違いはあるにせよ、データを圧縮するという点で、検値限がものをいう共通の悩ましさをもち、提供される側と提供される側の二面から大いに興味を持ちました。

きっかけはお客様からの相談です。たわいもない話題から始まりました。それが些細なことであっても、興味が湧くと自分なりに結論めいた意見を持ちたいと思います。この、地上波デジタル(BS/CSを含む)受像機に関しても、昔取った杵柄というべきか、自分では、まだまだとっていましたが、なぜか巻き込まれていき、結論を出すにいたりました。本書は、その経緯をまとめてレポートしたもので、時々読み返して思い出すメモ的なものです。

最終目標は対価を支払い、いずれかの機器を購入することです。迷いの中から結論を出すことには価値があり、納得するまで検討することは、熱意と持続性が必要です。完璧を求めるあまり、現在は購入すべき時期でないという結論を得るのは簡単です。しかし、それでは本気で検討したことにならないし、製造者の立場と対等にはなりません。真っ向から彼等と勝負して納得できるものを選択したいと思えます。

2008年1月28日

構成・文責 須山祥市

(無断転載を禁じます。)

1.最初に

画面サイズ

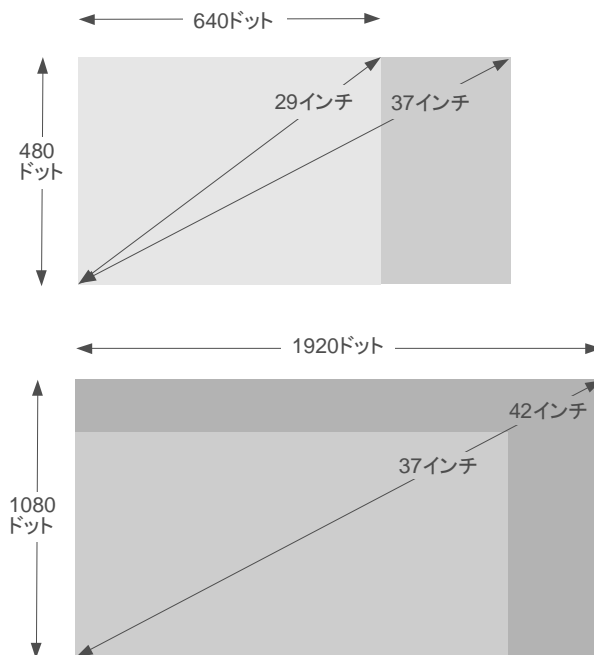
従来640×480ドットと表記していますが、TV放送は4.2MHzのトラップが入っており、実際には340ドット×480ドット相当を表示するものです。

ブラウン管では、ビームの速度変調などによって、340本の解像度でも輪郭をシャープに見せたりすることができました。

放送番組の画像サイズは、さほど大きなものは想定していません。せいぜい26～30インチ程度。

表示ドット数

従来使用してきたのが、PROFEEL -PRO 29インチであったため、高さ寸法を同じく16:9とすると37インチ相当になります。一方、ドット数で比較すると、従来640×480ドットで29インチであったのに対して1920×1080ドット数で約6倍になりますが、表示部から等距離での視聴だと、それほど大きくすることは出来ません。また、ドット表示方式(液晶など)はブラウン管式に対して輪郭や精細感が低下するとか、放送のカメラワークを見る限り大きな画面は目が回りそうなこともあって、高さ方向でせいぜい20%程度しか許容出来そうもありません。結局37～42インチぐらいが適当な大きさということにしました。画面が大きくなるにつれ、動画ブレや残像感にも影響するため画質的にも苦しい領域に入っていきます。また、消費電力、総重量、廃棄処分時の費用などにも大きく影響します。



一番売行きを伸ばしているサイズが30～32インチといわれていますが、これは、置きスペースの物理的な理由とともに、放送番組の画角や内容が大きく影響していると思われれます。しかし、ブルーレイやHD-DVDで映画を観る「迫力重視型のユーザー」は、少し大きめの50インチ程度のサイズに魅力を感じる可能性は十分考えられます。したがって、この2つのカテゴリーを同じ画面で兼用するのは難しいと思います。

出来るだけ、フルハイビジョンのドット数である1920×1080の新しいモデルを選択すべきだと思っています。従来モデルでは垂直が768ドットしかないものがあり、このなかに垂直補間がうまく行われていないのではないかとさせるセットも見受けられます。垂直にカメラが移動すると画像の一部が崩れることがわかります。水平ドット数の違いは精細感の有無や輪郭補償などでわからなくなる場合もありますが、垂直ドット数の処理は難しいものがあります。必ず垂直は1080ドット(あるいは1/2の540ドット)のセット、あるいは、画像をよく確認する必要があります。

フルハイビジョンは、オーバークオリティーという人もいますが、私は、フルハイビジョンで初めて画像の質が問題にされるようになったのではないかと思います。

画質評価の難しさ

人が美しいと思うシーンやカットを集めて疑問や質問が出ない画像シーンの集合で構成されています。

Hi-Vision受像機の画質を評価する前に、撮像側の問題点も配慮しておくべきことがあります。まず、撮影時の動画ボケやカメラ自体の固有の残像、レンズの収差にはじまり、まれですが熱などによりCCD3枚のピクセルずれ、フランジバックずれなども存在することを認識しておくべきです。どの撮影現場でも完全な撮像技術が駆使できるとは限らず、評価に使用できる映像源となる番組は多くはありません。一方、放送局の代表的な看板番組(大河ドラマなど)では全体的に質が高い傾向にあり、そのような番組で受像機を評価することはとても有効です。また、NHK、日本テレビ、TBS、フジテレビ、などの日本を代表する局の高品位な番組(Hi-Vision制作)では自社の映像ポリシーが反映しており、少しづつ美しいと思わせる要素が異なるものになっています。

受像機器メーカーでデモンストレーションに使用する画像は、問題点が高い次元でクリアされているものが多く、驚くほど美しいものです。しかし、それだけではユーザーは納得しません。元が悪ければさらに悪く表現されることがあるかもしれないと推察されたり、特殊な画像として、かえって逆効果になる場合があります。

大型受像機ユーザーとしては、いくつかの見慣れた映像ソースを評価に使用するのが得策です。見慣れた画像の持ち合わせがない場合、映画好きなら、まず映画を観に映画館へ行き、気に入ったタイトルのブルーレイディスクを購入し、そのディスクをお店の受像機売り場で再生してもらいイメージに近いテレビを探すことです。

あるいは、自分が撮影した静止画像の入ったメモリーを持って行くのもいいかもしれません。他社比較だけで頑張るなら、少し暗めのテレビ売り場を探し、めぼしをつけたセットを比較しながら検討することも必要です。

昔、放送局の技術の人に各社のテレビを評価してもらったことがあります。その担当者は、「今はどこのテレビも良くなった、また、どれもモニターより美しい」また、「復調軸はIQにこだわらなくても、色差でも十分いける、広帯域にしてるんだ・・・」と感心ばかりして、現場の苦労はわかったけれど、比較評価を引き出すまでにいたらなかったと記憶しています。やはり、他力本願は良くありません。

画質評価の独自性

さまざまな評価方法を実践してもあまり意味がない、テレビは所詮白物という人もいます。しかし、スチール写真やビデオカメラに興味を持つ人にとって、案外テレビの性能は興味の対象になっているのではないのでしょうか。専門の雑誌を読んだり、店頭販売員に話を聞いたり、インターネットの書込みを読んだり、さまざまな情報を収集します。しかし、それでも、自分が納得しなければ意味がないわけで、第三者が公平な視点でテストした結果などもあればよいのですが、なかなか思うようなものはありません。自分なら、適切に評価できるいくつかの動画パターン発生器などをこしらえてテストしてみたいとも思います。しかし、そんなコストをかけるならば、主要各社数機種を購入して比較しながら楽しむ方が有意義かなとも思えます。評論活動をしている知人は、どの製品も良い点、悪い点があるから50歩100歩だよ!と云ってましたが、絞り切る判断力がないのは残念なことです。自分は悪条件下でも結果を出すつもりです。そのために、自分なりに試行錯誤を繰り返しながら、ことあるごとに店頭で熱心に画像比較をしています。ただ、闇雲に比較をしても時間がかかるだけなので、ある程度効率的に自分にとって重要な評価項目に絞ることにしたいと思います。

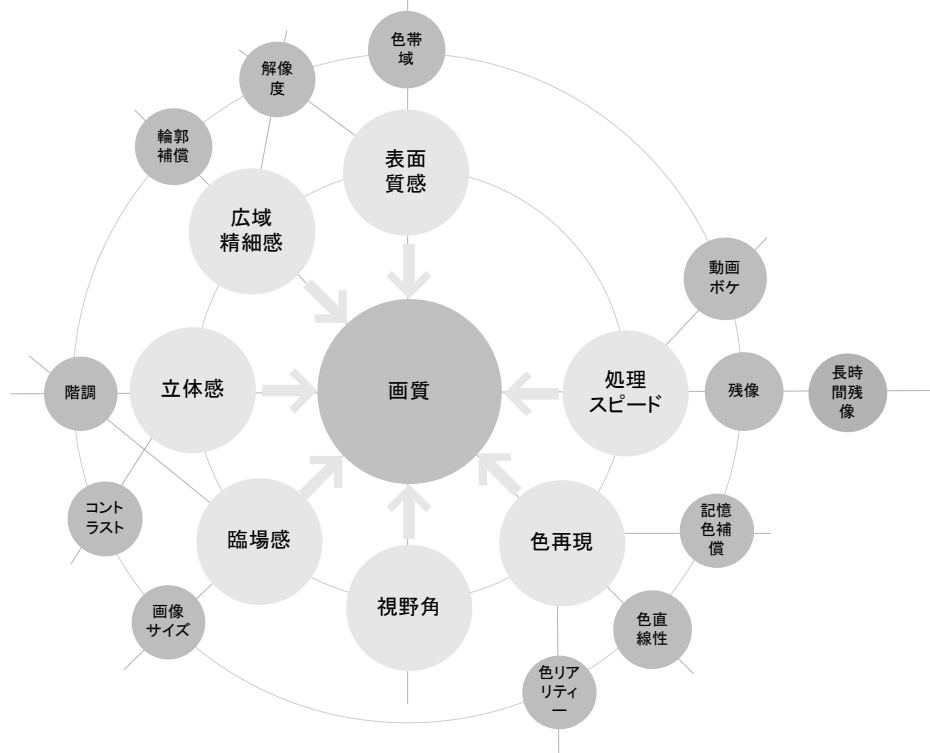
2. 評価項目を絞る

評価項目の分類

一般的に画質を評価するのに用いられる要素は、精細感、色再現、階調表現、残像などです。これは、デバイスの持つ性質や設計時点で検討されている技術要素でもあります。また、ホワイトユニフォーミティーやドット欠けなど、製品の製造上の問題なども気になる要素です。また、購入後の経時変化がどのようなものか把握しておく必要があると思います。さらに、どの状態になったら寿命なのかも知りたいものです。

思い浮かぶ価値観を体系的にまとめて図形化します。満遍なくよく考えてまとめればよいのですが、やはり、気になる部分を優先的に行います。右の図は途中ですが、頭の中をまとめるのに、わかりやすくなります。完成していませんが、適当でも十分な効果を発揮します。

画質は、観る人によって大いに評価が異なりますが、ここでは、自分の価値で画質の構成要素を分類し、以下のような形で考えました。これは、ベースになる単一項目で評価出来るものと、いくつかの要素が複合的に重なり合って評価されるものとありますが、我々視聴者が評価できるのは、それらが組み合わされた「感覚的」な領域だと思います。37～42インチの大きさのHi-Vision テレビを比較するならば、自分にとってそれが重要です。



3. 主要な項目

精細感 →

解像感とも言えます。きめ細かく見えることです。少し細かい被写体になると全体にギラギラ、テカテカして邪魔をする場合もあります。

色再現 →

被写体の色が忠実な色を再現していることです。また、被写体の大きさや明るさが変化しても色が変わったように見えないことも重要です。

自然界にある物体で精細感のある被写体はそれほど多くはないはずですが、被写体へのライティング手法であったり、撮像レンズの特性であったり、電気的な輪郭補償回路であったりと、人はそれを心地よく感じることから、よく強調される場合があります。しかし、細かいところまでよく分解する解像力の高いシステムでは、むしろ精細感は消えてしまいます。むしろ輪郭が丸く感じたりします。Hi-Visionでは、最高でも1920×1080ドットしかないので、同じ解像度ならば精細感は調整できるほうが良いと思います。

一般的にテレビ放送では、被写体と表示画像を直接比較することが出来ません。これは、評価上致命的で主観に頼るしかないのが現状です。あくまでも、「好み」ということになります。しかし、いつも自然界の物体の色をよく観察しているとか、自分の記憶している色を信じる(記憶色)とか、色彩に対する経験を積んでおくとそれなりに判断がつくものです。

カタログなどを見ると、1.GBRの色純度を上げるくふうをして、分光感度曲線を急峻にしたとか、2.様々な人肌色を忠実に再現するため、赤色の分光感度のピークを2つ持たせたとか、色々能書きが書かれています。しかし、2はどう考えても変な説明に思えます。それは、カメラにそのような分光をするダイクロイック膜、あるいはマトリクス補正回路はないからです。

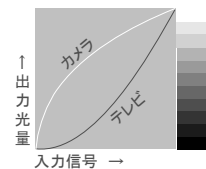
記憶色 →

かなりそれらしい色に見えること。または、実物より美しい色に見えることです。

残像 →

絵が流れたように見えることです。

階調表現 →



ガンマ曲線で表します。カメラ側では、黒の部分で急激に立ち上げる逆の曲線の補正をかけており、トータルで直線を目指します。カメラは、黒レベルが若干上ったり、もぐったりする。そのため黒の管理はシビアに行われています。

モニターに表示された女優さんのフェイストーンは家庭用受像機のフェイストーンよりはるかに良くありません。それは、モニターが記憶色に対する補正をしていないからです。家庭用受像機の色は、たいがいフェイストーンで判断されることから、昔は、復調軸をずらして、肌色に近い色の座標付近が大きく振れないように調整したものです。最近では肌色のみならず記憶色を実験的な結果から判断し、物体の色がよりそれらしく見えるように補正をしています。そのような画像は鮮やかで生々しく、「自然で鮮明な画像」と判断されることが多いといわれます。このようなテレビはカメラの画像をモニターでチェックして忠実度を追求しているような人には、少し派手な画像と判断される場合があります。

液晶テレビでは120Hz駆動で大きく残像が改善されました。すでにそれだけでプラズマでなければならない理由として上げることはできません。ただ、液晶は明るいテロップでは改善が顕著でも、残像感はまだ残ります。さらに、夜間の撮影画像を見ると残像が目立つ場合があります。画面サイズが大きいほど、残像感は目立ちます。

月明かりの暗い場面から、眩しいくらい明るい場面までを、ある範囲の光の変化として収めるカメラは、肉眼に近いダイナミックレンジを追求しています。一方、それを見易く表示するために必要なのが表示装置の階調特性です。輪郭線を描かずに光の明暗あるいは濃淡だけで自然に輪郭を表現するためには、きめ細かい階調表現力が必要になります。これは、画面平均の明るさが中央に寄っている場合を想定して考えると1024階調もあれば十分と思えますが、実際は画面平均の明るさがさらに明るい方へ寄っている場合、または暗い方へより寄っている場合などがあるので、単純に1024階調といわれても十分といえない場合があります。特に、画面平均が暗い場面ではそれが顕著になります。「よく黒が出ますか？」と一般の人が聴いてもわけがわからない言葉を専門家は使いますが、暗い場面でちゃんと階調表現ができるか？という意味で使われたり、信号が0の時に、真に「真っ黒」になりますか？という意味で使われたりしますが、その場合、照明までも落として、さらに暗闇に目が慣れてしまうと、また黒の階調が出てくるため、追っかけごっこです。そのくらい、暗い部分の表現力にこだわっているということのようです。

4. 機器選出

対象機器

市場にあるいくつかのセットの中から、個人的な観点から興味深い3機種に対象を絞り比較検討をしました。その3機種とは、

1. BRABIA KDL-40X5000 (ソニー)
2. REGZA 37Z3500 (東芝)
3. VIERA TH 42PZ750SK (パナソニック)

これらは、幾度となく店頭でその他の機種などと比較し、カタログ等のスペックから判断し絞り出したもので、おおよそそのメーカーの主力競合機種ともいえる商品です。また、画質改善という点では、さまざまなくふうが随所に盛り込まれて、まだまだ改善の余地はあるものの現状ではベストを尽くしたものと思われる。

また、これらの機種はきめ細かな調整をして「設置環境でユーザーの好みを反映できる」機構を備えています。

5.画像の印象を掴む

3機種をざっと眺めて印象を掴みます。この最初のイメージはとても重要です。細かく見ていくと判断しやすいように思えますが、画像は第一印象がとても重要です。理屈で選択するとどうしても、性能に近いところで評価しようと努力しますが、第一印象は全てを総合して一瞬で好き嫌いが判断できる場合があります。

しかし、一方で、機械的に細かいところを順次調べてゆくことで後々納得できる評価につながることもあります。現実的には両者が一致するのがベストなのですが、ひっくり返ってしまうこともあります。第一印象は、40X5000が良かったけれど、調べていくうちに42PZ750SKが良くなってきたということもあります。

画像を見て、どの調整機構をどうすれば自分の好みに近づけられるか容易に予想がつくレベルにないと比較検討は出来ません。そのためには、地上波デジタル放送をある程度の期間は眺めて感じを掴んでおく必要があります。



液晶

液晶の明るさは、バックライトによるもので、コントラストはかなり高く設定されています。高すぎると眩しいので、家庭に設置するときは少し明るさを下げるといいと思います。

BRABIAが最初に市場に出たとき、渋谷の店頭で「液晶でも、こんな色が出せるんだ」とつぶやき、驚きました。そのことは鮮烈に記憶しています。しかし、人の目は優れた画像を見るたびに慣れてきます。しかも、その後新製品が出るたびに驚くことばかりでしたが、このKDL-40X5000は色が綺麗で鮮やか、シャープに輪郭が出てとても心地よい画像に感じます。こんなに綺麗に見えてよいのか！と「少し作りすぎ」とさを感じます。REGZAは対照的に自然な色合いです。「そうそう、液晶はこういう色じゃないとね、これが自然だよな」と安心します。回路的な部分でもトランジエントのよい画像とでもいうのでしょうか、電気的な問題点を見つけにくい画像です。どちらもわくわくするような美しさを備えています。カチッとした輪郭ときらびやかな色彩のBRABIAには飛びつかせる魅力を感じ、少し控えめだけど安心できる色彩と自然な美しさでREGZAという感じです。画像は全く対照的ですが、いずれも魅力を感じます。

プラズマ

明るくて直接目に飛び込む色彩の液晶に対して、VIERAは前面フィルターを通しての画像はおせいじにも、一見して「とても綺麗で鮮やか」とは言えない画像です。しかし、周囲の明るさを落す(店頭でも同様な条件で表示)ことで、落ち着いた色調の中にも、自然な階調が画質に与える影響が大きいことを再認識させられます。分かる人にはすぐ分かる、やや玄人好みの画質であると思いました。テレビは回路にある悪さは全て画像として表に出るものですが、素性のよさは思いもよらないところで発揮されます。自発光による階調特性は、遠近感や実在感をよく再現します。それでいて質感の再現にも大変優れています。また、輪郭強調が控えめなためカメラの被写体深度をリアルに表現できています。

6.細かく見る

項目チェック

◎○△×などの印を付けると、良否ようになってしまいますが、あくまでも好みがあることに注意してください。

経験によって画像の見方や感想は人によって異なります。女性は化粧の状態や服の生地、アクセサリーに敏感です。さらに絵を描く人は微妙な色彩や階調にとても敏感です。人は、経験を積むごとに、画質に対してある面で検知眼が上がります。それに伴い感動は減っていきます。これらは、他人の評価が必ずしも自分に適しているとは言えない要素だと思います。

自分なりに気になるチェック項目を一覧表にまとめました。各セットを横に並べて比較したわけではないので、あいまいな部分ではありますが、このような印象を受けているということです。ただ、あとでどの部分を評価したのかわからなくなることもあったり、間違っただけの言葉を使っている部分があるかもしれないことから、各項目ごと詳説を付けて関連付けをしました。○が良好、◎は大変良い、△は少し不満が残る、×はちょっと敬遠、になります。結果的には×はありませんでした。あくまでも自分の価値観で、各セットの相対的なものです。(同一モデルでもわずかに異なる印象を受けたものもありますがそれも含めて累積での評価です)

	項目	BRABIA 40X5000	REGZA 37Z3500	VIERA 42PZ750SK
映像基本	色再現	◎	◎	○
	色リアリティー	◎	○	○
	輪郭	◎	◎	○
	広域精細感	△	△	○
	分解能	△	△	○
	視野角	○	○	◎
階調	明部	△	△	○
	中間	○	○	○
	暗部	△	△	◎
残像	動画ボケ	○	○	△
	残像	△	△	◎
	長時間残像	△	△	◎
印象	硬質感	△	△	○
	立体感	△	△	○
	表面質感	△	△	○
音声基本	音の広がり	○	○	◎
	高音と低音	○	△	◎
	分解能	○	△	◎
	音の定位	○	○	◎
オプション	拡張性	○	◎	○
	利便性	○	◎	○
	デザイン	◎	◎	◎

画像のサイズ(37/40/42インチ)や外形寸法、価格、消費電力などを全く無視して評価しています。画像のサイズが大きいと動画ボケや残像は目立ちやすくなります。また、小さい画面は精細感があります。

7.ポイント

詳説

うるさいことを書いているようですが、所説たいしたことはありません。普通に見えればOKなのです。しかし、長い間使用すると、調整でも直らない癖が分かって、がっかりすることもあるため、普通に見ることは難しいと思っています。

比較的大きな被写体では輪郭が綺麗に出ているのに、被写体が小さくなっていくと、解像度が不足しているわけではないのに、分解できず、全体の精細感を損なう場合があります。

お年寄りが「ちゃんばら」がお好きなことは、偏見かもしれません。そこで、シーンを変えて競馬中継では、パドックのサラブレッドの毛並みや毛艶の判別には、暗部での階調表現力が重要です。と読んでいただいても結構です。

色再現は、地上波デジタル放送自体で優れていることから、当初美しさに戸惑いがありました。また、ブラウン管式受像機を処分してしまったことを大いに反省しました。とりあえず、ブラウン管式でチューナーを交換して綺麗な映像を楽しめたのではないかとことです。そして、解像度に不満が生じたときに、大画面に切り替えるというプロセスを踏んでも良かったのではないかと思います。

その理由としては、現状の放送のうちHi-Visionを生かして制作されたものがまだ少ない。また、カメラワークも従来のままのものが多く、それを大画面で見ると目が回るようなカメラの動きに酔いそうだからです。

色リアリティーとは、より本物らしい色を表現しているかということです。実際のカメラで撮影してもなかなかこんな色は出ない、どちらかというと沈んだ感じになるのだけれど、BRABIAはすごく鮮やかに見えるという感しです。自分的にはありえない色だとも思いますが、華麗でプリリアントなので気持ちが良いと思います。42PZ750は、そのような輝きはないものの、渋くて落ち着いた色彩は、かつての放送用プランビコン3管式カメラの色に似たイメージで好感がもてます。

エッジが立たなくても輪郭が明確かどうかです。一方、輪郭ばかり強調されていないか、輪郭部分とそうでない部分の違いを見えています。比較的小さな被写体でも同じ傾向にあるかを比較します。輪郭のエッジが良く立ちシャッキリした感じは気持ちが良いのですが、強すぎると遠近感は適正な感じになりません。

精細感とは、風景などを写したとききめ細かさが再現できるか、細かな被写体の場合に画像全体がぼやける印象がないか、わずかな凹凸も表現できているか、また、自然な感じを失って「ぼわーっと」しないか、さらに、全体のコントラストが十分なバランスで表現されているかを見えています。

分解能は図形の大きさの変化によって、その被写体の図形の印象や質感が変化しないかどうかです。表示パネルの解像力は高いのに、セットによっては「つるんとしたべったり感」が強くなる場合があります。

視野角は、狭い部屋の中では重要な役割を果たします。ある角度から見ると上記のような説明が無意味なほど白または黒に寄って見辛くなります。液晶は以前のモデルに対して大きく改善されているようですが、プラズマには全くありません。

家庭用受像機の階調表現能力は少し電光変換特性をねかせておくことで様々な番組のシーンで心地よく楽しめなければなりません。その場合、まず暗部での階調表現能力が重要です。これが不十分だと闇夜のガラスが、少し暗部を浮かせないで見辛くなり、画面全体を白濁させたような画像になります。このあたりの表現力はかなり重要なはずですが、特に、お年寄りのお好きな時代物の辻斬りシーンや忍者の動き、月明かりでの立会い、など、電気のなかった時代の再現ドラマではとても重要な性能になります。また、明部でも同じことが言えます。晴天時のフィールド競技の撮影ではコントラストが高く、1600%以上のダイナミックレンジに達します。そのために撮影側では、回路的くふうを凝らしたカメラで撮影しているにもかかわらず、背景がごとごとく白く飛んでしまったり、画面全体が眩しくなってしまうのは目が疲れてしまいます。液晶では、スタジオ撮影画面では良いけれど、このあたりの暗部と明部の処理にやや不満が残ります。

動画ボケは様々なシーンで見苦しい画像になります。輪郭がスピードとともに流れます。もちろんすばやい動きは撮像方式の限界に近づき、明らかな動画ボケになりますが、問題はそれ以下のスピードでどのくらいの動画ボケがあるのかです。プロセッサの処理が少し遅いのではないかとされる場合もあります。

さらに、司会者が頭を動かすだけでぼける、あるいは残像がまわりつくのはいただけません。このあたりを比較したのが、残像です。暗部での残像を個別に細かく評価していませんが、明らかに気になる特性です。

液晶はさらに長時間の残像現象まで見受けられます。これは、白い背景の前で司会者がしばらくその位置で話していて、歩き始めた瞬間、前の位置にあったシルエットがしばらく(数秒レベルで)残ります。コントラストの高いところでは目立ちます。

画像の全体の印象を、硬質感、立体感、質感などに分けていますが、全体としてのねらいは被写体がより本物に近いかどうかです。硬いものや柔らかいもの、平面的にみえてしまうのか立体的にみえるか、表面の素材感などをそれぞれ印象として捉えています。さほど気にしない人は気にならないのですが、撮影者はそれらしく見えることは重要だと考えているはずです。

音声ステレオに関しては、サイドスピーカーが有利です。音楽番組では、3ウェイが分解能に優れて綺麗な音を出します。同じユニットを縦に並べると水平方向の指向性が改善され広がりが増します。ただ、低音は、テレビの場合キャビネットが小さいのでどうしても明瞭度が低下します。REGZAのようにディスプレイ下部から湧き出るような音は、やや明瞭度に欠けます。PZ-750SKではウーファーにパッシブラジエータが付いているようですが、バックチャンバーが少し小さく、低音が中域にかぶる感があります。竹スピーカーは明るく明瞭な音が出て、遠くからでも聴きやすくなっています。

オプションに関しては、出来るだけ汎用の製品を利用して目的が達成できる拡張性があるとうれしい気持ちになります。REGZAは、ネットワークHDDを接続することで録画が出来たり、メールで録画予約(利便性)できるのは、とてもありがたい機能として評価されるべきことです。先行きは、ブルーレイディスクやHD-DVDを購入するにしても、とりあえず、安価に録画できる機能は便利です。3機種ともそれなりに美しい洗練されたデザインで大変好感が持てます。

8.途中経過で決定

正確にしたいと思っははじめた機器比較ですが、細かく見れば見るほど、あるいは時間経過によって見慣れた結果なのかもしれませんが、徐々に「PZ-750がいい」と思うようになりました。そこには、臨場感、立体感、表面の質感といった伝わりにくい画像の質の高さを感じたからです。これらが私にとって快樂物質になり、気持ちよく感じる要素になったからです。最初は液晶のブリリアントな発色に「綺麗だなあ」とも思っていました。条件が良いと綺麗なんだけど、なぜか時として繊細な感じと、「べたっ」とした相反する感じを受けることが多いのです。また、明るさを落とすとちょっとカラーバランスを触りたくなるし、明るくするとやや蛍光色になる感じがでてしまい、液晶の色に飽きてしまいました。そのことが、せっかく送られてくるHi-Vison 制作の画像を観ながら後々「がっかりしたくない」という恐怖につながったのかもしれない。

9.ちょっと感想

店頭で、同じように地上波デジタルテレビを見比べている人たちがたくさんいらっしゃるのですが、みなさん同じ目的なのだろうと実感しました。販売員の方にお話を伺うと、それが先入観になったり、疑問になったり少々厄介なので、黙って見比べるのですが、ほかの人に迷惑になるのではないかと心配で、あまり同じテレビの前で時間を掛けることが出来ません。映像機器は、やはり、1台を決めてじっくり観て画像の癖をつかみながら比較できれば、もっと正確なことが早く把握できたのではないかと思います。結果的には消去法で容易に倍速液晶モデルが消えましたが、もっと、迷ってしまう状況に置かれるのではないかと、期待していた部分もありました。最近、一生懸命に目を凝らしてみる画像は医療画像が多かったせいか、濃度分解能にとてつもなく敏感に反応し、偏った見方になったのではないかと、Hi-Visionに対するイメージも根強いものがあり、当然その受像機に対する期待も大きすぎたのではないかと思います。でも、今回の比較検討調査を通じて、疲れはしましたが、それなりに得るものがたくさんあり、自分なりの意見をまとめることが出来ました。

10.使い方

設定

購入者は比較という重圧から解放されて、純粹に画像を観る事を楽しみにしてしまいうため、一旦は比較検討時より検知限は下ります。しかし、また新製品を知ると、検知限は上がり、今度は今のテレビで積極的に不満を探すようになります。

めがねをかけたドットが見えます。ノイズも見えます。でも、見えないことにしたほうが楽しめます。

ということで42PZ750を1月22日に購入しました。購入するまでの比較検討が楽しいのが映像機器の面白さでもあるのですが、購入後もいくつかの感動があるのがフルハイビジョン受像機ではないでしょうか。といっても、私は普段なら2週間ぐらいで大体の画像の印象が残り、頭で飽きてしまうことがあります。

候補の3機種全てを同時に自宅で2週間ぐらい使用してみると、また違った発見があったかもしれませんが、フルハイビジョン・プラズマは奥が深いと大いに満足しています。音も大変明瞭ですし、映画でも専用のオーディオコンポがなくても十分迫力あるサウンドを再生してくれます。また、音量を下げても明瞭なので深夜一人で楽しむのにも不自由を感じません。

画像調整は、被写体の質感を重視して「スタンダードポジション」で「色の濃さ -20」、少電力設定2(少し暗く、色が薄い)。音声も「ノーマル」で「BASS-10」です。これで、どの放送局もほぼ満足の行く画像と音声を得られました。7畳程度の広さに30Wの蛍光灯2本に落とし(通常4本点灯)でちょうど良い感じです。店頭よりはさらに自分好みになりました。この設定でかなり満足しています。

プラズマディスプレイは歴史があり、技術的にも確立した部分が多いのも事実でしょうが、かつては、ドットが見えるような大きなパネルばかりで、少し離れてみるものでした。しかし、この42インチフルハイビジョン受像機によるドットが見えない(1.6mの距離)緻密な画像が、家庭用価格で手に入ることに改めて感激しました。

以上

備考) 本文の中で説明している店頭とは、ビッグカメラ、イトーヨーカ堂、ヨドバシカメラ、等のテレビ売り場を指します。参考にした資料は、ソニー、東芝、シャープ、のカタログと各社のホームページです。説明に使用している用語は、テレビジョン学会、電気通信学会などで使用しているものと異なることがあります。意味不明な感覚用語がいくつか出ていますが、勉強不足で適切な言葉が見つからなかったためです。今日(28日)ビクターからLH905シリーズが発表されています。「高画質と臨場感の再現」というキャッチフレーズで、興味がわきます。